

東邦大学学術リポジトリ

Toho University Academic Repository

タイトル	価値の多元性と動機の一元性
別タイトル	Plural Values and Motivational Unity
作成者（著者）	塩野, 直之
公開者	東邦大学
発行日	2023.02.28
ISSN	03877566
掲載情報	東邦大学教養紀要. 54. p.43 56.
資料種別	紀要論文
内容記述	論文
著者版フラグ	publisher
JaLCDOI	info:doi/10.14994/toho.liberal.arts.rev.54.43
メタデータのURL	https://mylibrary.toho-u.ac.jp/webopac/TD28213175

価値の多元性と動機の一元性

塩野直之*

Plural Values and Motivational Unity

Naoyuki SHIONO*

Abstract

This paper starts with the often drawn distinction in the philosophy of action between evaluation and motivation, and examines an apparent trilemma between the following three theses: the comparability of motivational strength in a unitary dimension, the coordination between evaluation and motivational strength, and the plurality of values. The paper proceeds to propose various ways of resolving the trilemma, but encounters another difficulty along the way, which I shall call the “motivational hijacking” of practical reason. It amounts to the worry that we engage in practical reasoning only to arrive at a conclusion we are most motivated to accept. The paper does not really remove this worry, but closes by emphasizing that practical reason still has its worth.

I. 序

われわれがある行為を行う際には、その背後に、その行為自体やそれによって達成されるものごとを欲したり、それらを望ましいものとみなしたりする、当の行為主体の何らかの態度があるはずである。それはかつて、意思決定論や標準的な経済学が「効用」と呼ぶものとして、単一の尺度のもとに捉えうるものとみなされることが多かった。ところが近年の心の哲学や哲学的行為論では、そこに「価値評価」と「動機」という、異なる二つの側面を区別することが有力になってきた。簡単に言うと、価値評価とはさまざまなものごとの持つ価値の理性的な評価に関わり、動機とはわれわれを行為へと動かす情動的な力である。

また、この流れとは別に、価値の問題を論じる多くの哲学者によって、われわれが人生の中で追求するさまざまなものごとの持つ価値は、それ自体、多元的な性格を有するという主張がなされてきた。健康、家族や友人、学問や芸術などは、いずれもわれわれにとって高い価値を持ちうるが、それらの示す価値は種類が大きく異なる。したがって、それらのどれがどれだけ高い価値を持つかを一元的な尺度で比較することはできない。このことは、われわれが複数の選択肢となる行為から一つを選び取って遂行する場面で、それらの各選択肢が異なる種類の価

*東邦大学理学部

値の実現に寄与するものであるとき、どうすれば合理的な選択ができるのかという問題を提起する。価値の多元性をめぐっては、この問題を中心に、これまで相当の議論が蓄積されてきた¹。

ところが価値の多元性の論点は、先の価値評価と動機の区別の論点と組み合わせると、さらに錯綜したいくつかの困難を生じさせるように思われる。しかし私の知るかぎり、それらの問題はこれまであまり主題的に論じられることがなかった。したがって、それらの困難を析出し、それらがわれわれの実践理性に関して何を含意するのかを明らかにすることが本稿の目的である。

以下の流れを概観すると、本稿は、価値評価と動機の区別をさらに詳しく説明することから出発し、それに基づいて、「動機の一元的比較可能性」および「価値評価と動機の相即性」という二つのテーゼを導入する。次いで「価値の多元性」のテーゼを説明した上で、これら三つのテーゼは同時に成り立ちえないのではないかというトリレンマ的問題を提示する。すなわち、価値評価は多元的な価値に関わるのに対して、行為と直結する動機はその強弱を一元的に比較できるのだから、両者のあいだに相即性が成り立つことはありえないように思われる。この問題の解消に向け、本稿は、マイケル・ストッカーやチャールズ・テイラーの見解を手がかりとしつつ、価値の多元性と両立可能な実践理性のあり方を検討する。しかしそこにはさらなる困難として、そうした理性の行使は、私が「動機による乗っ取り」と呼ぶものに曝されるのではないかという問題が待ち受けている。すなわち、われわれの理性が最もよいと判断する行為は、結局、われわれが最も強く動機づけられた行為にすぎないのではないかと思われる。本稿は最終的に、この困難を解消するには至らないが、それでも実践理性の本性の探究とその行使には意義があるはずだと論じる。

II. 価値評価と動機に関わる三つのテーゼ

・価値評価と動機の区別

われわれは、どのような行為を選択し遂行するのがよいか、理性的に考えて判断するものである。しかしそうした思考を経て、ある一つの選択肢が最も望ましいとの結論に達しても、どうしてもそれをしたと十分に思うことができず、結果的にその行為を遂行しないことがある。この現象が、意志の弱さである。ゲイリー・ワトソンは、この意志の弱さがなぜ生じるのかを説明する文脈で、次のように、価値評価と動機の区別を導入した。

…「より欲する」や「最も欲する」に、二つの意味を区別しよう。すなわち、価値評価の意味と動機の意味である。第一の意味では、人がyを行うことを欲するよりもxを行うことを欲するならば、その人は…何らかの価値評価の尺度や「望ましき指標」において、xをyよりも高く位置づける。第二の意味では、人がyよりもxを行うことを欲するならば、その人はyを行うよりもxを行うことにより強く動機づけられる²。

意思決定論や経済学の効用概念、またドナルド・デイヴィッドソンらの解釈主義の哲学において「解釈」の鍵となる「欲求」の概念は、この区別をせず、「欲する」を単一の尺度で強弱を問える心の状態として扱った。そしてそのため、それらの理論は意志の弱さの説明に困難をきたすことになった。ワトソンによるこの区別はその困難を回避する方策の一つであり、今日に

¹ Nagel (1977) は古典的な論文である。Chang (1997) 所収の諸論文に、さまざまな立場からの議論が見られる。

² Watson (1977), p. 38.

至るまで十分な影響力を持っている³。

価値評価とは、人が自らの行為について下す良し悪しの理性的な評価に関わるものである。人はみな、自分はどのように生きたいか、どのように生きるべきかについて、何らかの価値観を持っている。そこには道徳や倫理の領域に属するものも入るが、それだけでなく、自分にとって大切なものごとや自分が追求したい目標など、その人が関心を持つさまざまな事柄が含まれる。そして、具体的な場面で選択肢となる各行為の良し悪しは、そうした価値観を出発点とした、何らかの実践的推論のプロセスによって評価されるものと考えられる。他方、動機の強さとは、行為主体を行為へと突き動かす心理的な力である。人が実際にある行為を行ったとき、その行為がなぜ行われたのかという問いには、その行為を行うことへの動機の力が、他の行為を行うことへの動機の力よりも強かったからだという仕方では答えることができる。

価値評価と動機の区別は、哲学でなじみのあるいくつかの区別におおむね対応するものと考ええると理解しやすい。その一つは、昔ながらの理性と情動の区別である。さまざまな事情を考慮に入れて何が最善の行為かを選ぶのは理性の役割だが、行為主体が実際に行為を行うに至るには、それを行うことへと情動的に動機づけられていなければならない。そして理性的な判断と情動的な動機づけは、うまく連動している場合もあるがそうでない場合もある。第二は、ダニエル・カーネマンらの紹介により近年よく知られるようになった、行動経済学におけるシステム1とシステム2の区別である⁴。システム1は直観的な判断力であり、行動に直結したものであるから、動機に近い側面を持っている。他方、システム2は理知的で慎重な判断力であり、したがって価値評価をその一部分として含むものと考えられる。これら三つの区別の対応関係は、もとよりおおまかなものにすぎないが、いずれも人間の能力を大きく二つの要素に分けて考える点で軌を一にする。

価値評価と動機の区別と関連づけることのできる、もう一つの重要な区別がある。それは規範と記述の区別である。価値評価は、どのような行為がよいかを導き出す実践理性のはたらしに関わるものであるため、いかなる判断が下されるべきか、いかなる行為が遂行されるべきかという規範性を帯びたものとなる。他方、動機は現になされた行為に至る心理のプロセスのみに関わり、したがってそこに規範性の側面はない。動機に関する理論は、いかなる動機が存在してそれがいかにして実際の行為を生じさせたかについての事実を捉えることを目的とする記述的な理論である。

上の説明をふまえて、次に二つのテーゼを導入する。それらは価値評価と動機の区別から論理的に含意されるものではないが、それと密接に関連し、その区別を受け入れるならばそれらも受け入れるべきことに十分な理由があるものと思われる。

・動機の一元的比較可能性

第一は、動機の一元的比較可能性である。これは、選択肢となる複数の行為は、行為主体をその遂行へと動機づける力の強弱という一元的な尺度のもとで比較可能であり、とりわけ、最も強い動機づけの力を持ったものが実際に遂行されるというテーゼである。意志の弱さの説明という文脈で価値評価と動機の区別を受け入れた以上、これを否定することは難しい。なぜな

³ ワトソンに言及した文献としては、たとえばMele(1987)がある。私自身は塩野(2008)で同じ論点に訴えた。金杉(2014)も、意志の弱い行為を説明するために「価値判断における二つの視点」に言及しており、それはワトソンらの議論をふまえての区別だと思われるが、その二つの視点の本質的な相違についての理解は、本稿における私のものとは異なる。

⁴ Kahneman(2011)。

らば意志の弱さとは、最も望ましいと判断されたわけではない行為が遂行されることであるが、動機の強さの概念はまさに、なぜそこでその行為が遂行されたのかを説明するために要請されたのだからである。動機の一元的比較可能性は、この説明図式を意志の弱さの場合に限定せず一般化し、どのような場合にも、実際に遂行される行為への動機づけの力は他の行為への動機づけよりも強いとするテーゼにはかならない。

このテーゼはまた、先にふれた、動機の理論は心理的プロセスに関わる記述的理論だという論点とも結びつく。われわれが実際に観察できるのは、行為主体が現実に行う行為である。動機やその強さは心的状態であるから、それ自体は観察可能ではなく、むしろ、現実に行われた行為を説明するために行為主体に帰属させられるものである。心的状態に訴えることによる行為の説明は、まず、その行為を行うことへの動機の力が他の行為への動機に勝ったからだという仕方と与えられる。そしてそこからさらに、当の行為主体の持つ他のさまざまな心的状態を適宜的にたどることによって、その説明はいっそう十全で体系的な記述となる。つまり動機の一元的比較可能性は、観察可能な行為からさまざまな心的状態の帰属への入り口という位置づけを持ち、その理由からも否定しがたいと思われる。

・ 価値評価と動機の相即性

次に導入するのは、価値評価と動機の相即性である。これは、選択肢となるさまざまな行為のあいだでどれがより高い価値を持つかについての評価は、通常、どの選択肢がより強い動機づけの力を持つかと一致するというテーゼである。ワトソンは次のように述べている。

さて明らかに、価値づけをすることは欲することでもあるのだから、人の価値評価のシステムと動機のシステムは大幅に重なり合うはずである。もし、適切な状況において、価値評価をしたと言っておきながら行為への傾向性を全く持たなかったならば、その人がそのような価値評価を本当にしたという主張が反証されたことになるだろう。それゆえ、人の価値評価のシステムは、その人の動機のシステムに（相当な）支配力を持つのでなければならない⁵。

ワトソンは、意志の弱い行為がなされる場合のように、価値評価と動機のあいだに乖離が生じる可能性は認める。しかしそれはあくまで例外にとどまり、両者は原則として相即的な関係に立つと主張するのである。

価値評価と動機の相即性が成り立つと考えるべき理由は何であろうか。ワトソンの論述は、動機がないことは価値評価を行ったことの反証になりうるというものだから、一見したところ、この問いに認識論的な理由を与えているように見える。だがここにはさらに深い理由があり、それは価値評価が動機に対して支配力を持つということから導き出される。その点を説明しよう。

価値評価と動機の相即性とは、選択肢となる諸行為に関して、通常、高い価値評価を受けるものには強い動機が、低い価値評価を受けるものには弱い動機が伴うという意味である。しか

⁵ Watson (1975), p. 26. また、Mele (2004), p. 264に見られる次の論述も、用いられる概念は異なるが、同様の主旨を表明したものである。「…正常に機能している人間においては、（度し難い欲求などの）何らかの阻害条件が成立しているのではないが、Aをするのが最もよいという決定的な判断は、体系的に、Aをすることの意図をもたらさだろう。」

しそれは、最初から自ずとそうなるということではない。相即性はむしろ、価値評価が動機を支配する力を持ちうること、つまり、動機が価値評価の高さに応じた強さに調整されることによって成り立つ。すなわち、価値評価の観点からよいと判断された選択肢に対しては、意志の弱さが生じた場合を除き、相応に強い力を持つ動機が喚起される。また、価値評価の観点からよいと判断されなかった選択肢に対しては、やはり意志の弱さの場合を除き、動機の力が弱まるのである。

では、行為主体が価値評価の判断を下したとき、どのような仕方、通常は動機の力がそれに応じた強さのものとなるのだろうか。この問いには、動機の内在主義のような哲学的な道徳心理学からのアプローチも可能であろうし、より経験心理学的なアプローチも可能であろう。本稿はこの問いに深く立ち入ることはしないが、いずれにしても、価値評価が何らかの仕方、動機の力を調整する力を持つはずだと考えるべきことには、十分な理由がある。というのは、もしそうでなかったならば、価値評価の判断は、行為に対して何ら効力を持たない空虚な営みであることになってしまうからである。ところが、価値を考慮してどの行為がよいかを判断することは、実践理性の営みそのものである。そして実践理性の行使は人間の本質である。すると、価値評価が通常は動機に対して適切な支配力を持つことを否定することは、実践理性を行使して行為するという人間の本質を否定することにほかならない。価値評価と動機の相即性がなぜ成り立つのかに関して、これは相当に強い根拠と考えてよいであろう。

・価値の多元性

三つ目に導入するのは、価値の多元性のテーゼである。これは、上で見た二つのテーゼとは独立の論点であるから、本来はそれを受け入れるべき十分な擁護を必要とする⁶。しかし私はその擁護は別稿ですで行ったため、ここでは価値の多元性とはどのような論点かの概要だけを説明する。

価値の多元性とは、諸価値は本質的に多元的であり、それらを統合して比較するための一つの尺度は存在しないというテーゼである。すでに述べたように、価値とは、道徳や倫理を含みつつ、それだけでなくわれわれが自らの人生において重視するあらゆる多様な事柄を持つものである。多くの人にとって、健康はたいへん価値あることである。家族や友人とよい関係を築くことも同様であろう。さらに、学問や芸術、スポーツなど、自らの人生を捧げたいと思う大きな目標を持つ人にとって、それは非常に重要な価値である。食欲や性欲や睡眠欲などの欲求を満たすこと、十分なお金を持つことなども、当然、価値あることであってよい。

価値の多元性のテーゼによると、これら多様な諸価値に関して、どれがどれだけ価値が高いかを一つの尺度のもとに評価することはできない。まず、ある種類の価値が他の種類の価値よりも常に高い価値を持つということはない。たとえば、道徳がいかなる場合にも健康よりも重要だということはない。次に、ある種類の価値のどれくらいの量が、他の種類の価値のどれくらいの量とちょうど同量の価値になるかを定めるような換算レートは存在しない。ドルと円は異なる通貨だが、100ドルと1万円ではどちらが貨幣価値が高いかという問いには、為替レートを参照することで答えることができる。しかし、道徳と健康のような別種の価値に関して、そのような換算レートは存在せず、それらは本性上、質を異にするのである。

⁶ 価値の多元性を擁護する議論の代表的なものとしては、Nagel (1977)、Raz (1986)、Stocker (1990) が挙げられる。私はそれらのいくつかを塩野 (2019) で紹介した。

このような価値の多元性がきわめて日常的にありふれた現象であることは、直観的に納得できるであろう。素朴に考えて、道徳や健康、親しい人々やお金などは、それぞれ非常に異なる価値を持つ。それらすべてを相互に比較するために訴えることのできる一つの尺度があるという考えこそ、直観に反するものである。そのような考えは、功利主義の倫理理論や意思決定論における効用概念など、何らかの理論へのコミットメントから要請されることはあっても、そうでないかぎり説得力を持つとは言い難い。

Ⅲ. トリレンマの提示とその解消の方向性

価値の多元性を支持する場合、ワトソンが導入した価値評価と動機の区別における価値評価は、こうした多元的なものとして理解されることになる。するとここで、これまでに見た三つのテーゼのあいだにトリレンマ的な困難が生じる。すなわち、行為の各選択肢に対して、行為主体がそれをしたと思う動機をどれくらい強く持っているかは、一元的に比較可能である。他方、各選択肢が実現する価値は多元的であり、その場合、それらを一元的な尺度のもとで評価することはできない。するとそのとき、価値評価と動機のあいだに相即性が成り立つと考えることは、不可能ないし意味をなさないように思われる。

たとえば、私がコンビニで買い物をしたとき、小銭が100円余ったとしよう。その使い道として、アイスクリームを買うか、募金箱に入れるかという二つの選択肢があったとする。二つはいずれも価値ある行為だが、アイスクリームを買うことの価値はそれを食べて得られる味覚上の喜びなのに対して、募金箱に入れることの価値は公共の福祉へのささやかな貢献であるから、両者はたいへん異なる種類の価値である。したがって価値の多元性によると、それらの選択肢を一つの価値の尺度のもとに並べて比較することはできない。さて私は迷った末、募金箱に入れる方を選んだとしよう。すると、動機の一元的比較可能性のテーゼにより、この場合には、募金箱に入れる動機の方がアイスクリームを買う動機よりも強かったことになる。さらに、価値評価と動機の相即性のテーゼによると、動機の強さの順位がそのようであったのは、意志の弱さが生じたのでないかぎり、募金箱に入れる方がアイスクリームを買うよりも価値が高いという判断があったからだということになる。しかしこれは、価値の多元性のテーゼの含意することと相容れないように思われる。これがトリレンマである。

私は、このトリレンマを解消する道筋はあると考える。ここではまずその大まかな見通しを描くことにしたい。トリレンマを構成する三つのテーゼのうち、動機の一元的比較可能性と、価値評価と動機の相即性は、異論の余地がないわけではないにせよ、価値評価と動機の区別を受け入れる以上、受け入れないことは難しい。したがって上の例で、募金箱に入れるという行為が実際になされ、それが意志の弱さの事例にあたらぬという前提のもとでは、その行為がアイスクリームを買う行為よりも価値が高いという判断があったことは否定し難い。

しかし、そのような価値評価の判断が存在したことは、価値の多元性のテーゼと本当に相容れないであろうか。この点をさらに慎重に検討することに、このトリレンマを解く鍵があるものと思われる。価値の多元性はときに、価値の比較不可能性と呼ばれることがある⁷。つまり、行為のさまざまな選択肢が異なる種類の価値を実現するとき、それらの選択肢の中でどれが最も価値が高いかを判断することは不可能だという意味に理解されることがある。価値の多元性のテーゼをこのように理解すると、それは他の二つのテーゼから含意されることと正面から対立

⁷たとえばRaz (1986) がそうである。

し、トリレンマの解消は絶望的になるだろう。だが価値の多元性は本当に、そのような比較不可能性の意味で理解されるべきだろうか。言い換えると、価値が多元的であっても、選択肢となるさまざまな行為の価値を評価する何らかの判断は可能だと考えることはできないであろうか。

すでに述べたように、価値の多元性とは、異なる種類のさまざまな価値を一つの尺度のもとに統合することはできないという意味である。逆に、価値が多元的でないとは、そのような統合ができるという意味である。上の例で、味覚的な喜びと公共の福祉への貢献という二種類の価値のあいだに、どちらがどちらよりも常に優先されるという明確な序列があるならば、価値評価の判断は容易であろう。あるいは、そのような序列がなくても、異なる種類の価値が、為替市場にドルと円の交換レートが存在するのと同じような仕方で一つの尺度に統合可能であるならば、価値評価の方法はやはり明瞭であろう。すなわち、さまざまな価値を、価値の交換レートを用いて一つの尺度に統合し、その尺度のもとで最も高い値を示した行為が最も価値の高い行為であることになる⁸。

しかし、選択肢となる行為の中でどれが最も価値が高いかの判断を下すには、そのような一つの尺度への統合が不可欠であろうか。もしその判断を、何らかの別の仕方で下すことができるなら、トリレンマの解消への道筋が開かれる。すなわち先の例で言うと、募金箱に入れる方がアイスクリームを買うよりも価値が高いという判断はたしかにあったのだが、それは価値の多元性のテーゼに抵触しない仕方で下されたのである。そしてそのような判断があった以上、意志の弱さが生じないかぎり、価値評価と動機の相即性および動機の一元的比較可能性の両テーゼに即して、募金箱に入れる行為への十分に強い動機が形成され、実際にその行為が遂行される。こうすると、三つのテーゼは同時にすべて成り立つように思われる。

では、価値の多元性と両立可能な仕方で価値評価の判断を行うには、どうすればよいのだろうか。これはとりもなおさず、価値の多元性のもとで実践理性の行使はいかにして可能かという問題にほかならない。これは困難な課題ではあるものの、これまでそれに答えようとする試みがなかったわけではない。したがって本稿も、それらの試みのいくつかを参照しながら、以下の考察を進めることにする。ところが、価値評価と動機の区別をふまえた上でそれらを検討すると、そこにはこれまでやはりあまり論じられることのなかった、さらなる困難が待ち構えていることが明らかになる。それが「動機による乗っ取り」であり、それを提示することが以下の最も大きな目的である。

IV. 多元性のもとでの価値評価の判断と「動機による乗っ取り」

私は以下の検討を、次のような具体例をもとに行うことにしたい。40年余りにわたる会社勤めが定年を迎え、その後の人生の過ごし方について迷っている人物がいる。彼には三つの選択肢がある。第一は、なるべくこれまでどおりの生活を続け、できれば自分の職業経験を活かせる次の仕事を探すというものである。第二は、すでに成人していったん親元を離れた子供たちと一緒に暮らし、働くことはせず楽しく過ごすというものである。第三は、田舎に引っ越して晴耕雨読の日々を送るというものである。これら三つの生活プランは、それぞれ大きく異なる種類の価値を実現するものであり、少なくとも一見したところ、どれがよいかを比較することは困難であろう。

そこで彼は、実践理性をはたらかせて選択肢の良し悪しを吟味しようと試みる。だが、吟味

⁸ これらの論点について私は塩野（2019）で詳述した。

に先立って、どれを選びたいと思うかの事前の動機の強さは同じではない。そして、動機の一元的比較可能性を認める以上、それら三つの選択肢への動機の強さは一つの尺度のもとに並べて比べることが可能である。ここでは、第一の選択肢に対しては強い動機、第二の選択肢に対してはさらに強い動機、第三の選択肢に対してはそれなりの動機があると仮定しよう。それなりの動機とは、そうすることが決して嫌なわけではなく、十分な理由があればそれを選ぶこともありうるが、最初から強く魅力を感じるほどではないという程度の意味だとしておこう。

値段や大きさ、主要成分などに違いのない三種類のアイスクリームから、どれを選んで食べようかという状況では、単にいちばん食べたいアイスクリームを選べばよい。つまり、事前の動機の強さが最も強い選択肢を選べばよく、そこに実践理性がはたらく余地は実質的にない。しかし先の三つの生活プランの場合には、それらが実現する価値が大きく異なり、だからこそ理性的な検討を行う必要が生じるのである⁹。

以下で私は、私が「絶対的価値判断」「根拠なき価値判断」「総合的価値判断」と呼ぶ、価値評価の三つのあり方を考察する。それらの中で、絶対的価値判断は、それなりの有効性を持つものの、それだけで選択肢を一つに絞り込むことができるとはかぎらない。根拠なき価値判断は、検討すると、判断としての効力を持ちうるものでないことがわかるが、そのことが「動機による乗っ取り」の論点の導入に役立つ。最後に取り上げる総合的価値判断は、最も入念な考察を要するものである。

・絶対的価値判断

「絶対的価値判断」とは、各選択肢の良し悪しを吟味するとき、それらを一つの価値尺度のもとに並べて相対的な比較を行うことはできなくても、各選択肢について、それが実現する個別の価値の内部で考慮することにより、絶対的な意味で「良い」「悪い」という判断を下しうる場合はあるということである¹⁰。たとえばわれわれは、ある出来事を「最悪の事態」と呼ぶことがある。だがこれは、出来事の悪さを比較する単一の尺度があることを含意しないし、ましてやその出来事がその単一の尺度のもとで、それよりも悪い出来事が存在しえないほど悪かったことを意味しない。それが意味するのは、その出来事は何らかの重要な点で、きわめて望ましくならぬものだったということだけである。このような価値評価の仕方が絶対的価値判断であり、それが価値の多元性と両立可能なことは明らかであろう。

すると先の例の人は、成人した子供たちと一緒に暮らす選択肢を絶対的に悪いと考えるかもしれない。というのも、よく検討すると、そのプランは子の生活に干渉するおそれが大きい。そして彼の見解では、それはあるべき親子関係や子の自律性という価値基準に照らして、非常に悪いことなのである。このように絶対的に悪いと判断された選択肢は、いったん検討対象から外されることになる。「いったん」と言うのは、他の選択肢も絶対的に悪いものばかりで、悪くないものを一つも考えることができなければ、再びそれが理性的な検討の俎上に載せられることもありうるからである。

⁹ 経済学や意思決定論、あるいはそれらをふまえた Davidson (1990) のような一定の哲学的見解に立つ者は、意思決定のいかなる事例においても、考慮すべき事柄はすべて動機の強さに還元され、したがってあらゆる事例はアイスクリームの事例と本質的に変わらないと考えるかもしれない。私としては、価値評価と動機の区別を導入した時点で、そのような見解とはすでに袂を分かつたつもりである。また私は塩野 (2019) においても、その見解の批判的検討を行った。

¹⁰ 絶対的価値判断の概念は、Stocker (1990), pp. 331-338 および Stocker (1997), pp. 205-214 から示唆を得たものであるが、私の論述はストックカーの見解を忠実にたどることを意図してはいない。ストックカーの主旨はむしろ後述の「総合的価値判断」に近いものである。

ともあれ、こうして彼は、絶対的価値判断によって、選択肢の一つを少なくともいったん除外することができる。ただし、ここで意志の弱さが生じると、絶対的に悪いではない選択肢が他にあるにもかかわらず、絶対的に悪いと判断した選択肢の魅力に屈してしまうことがありうる。つまり、子の生活に干渉するのは悪いことだと思っても、子と一緒に暮らしたい誘惑に勝てず、そうしてしまうことがありうる。だが、価値評価と動機の相即性が成り立つ通常の場合には、絶対的に悪いと判断された行為への動機の力は弱まるか消滅し、その行為が遂行されることはなくなる。

実際、このような方法でいくつかの選択肢を取り除けることは、たいへん有益なことである。というのも、私は議論の便宜上、三つの選択肢があるという設定でこの事例を導入したが、現実には選択肢は無数ではないにせよ、他にもかなり数多く存在するからである。たとえば出家して仏の道に生きるとか、パチンコや競馬などのギャンブルにうつつを抜かすとかは、それぞれまた別種の価値を実現する選択肢である。これらを何らかの仕方でも除外する方法がないと、われわれの実践理性は、多すぎる選択肢を前にして判断不能に陥るおそれがあるだろう。

さて先の例の人には、絶対的価値判断を行使したのちにも、まだ二つの選択肢が残っていた。そこで彼がそれらを吟味すると、それらはいずれも絶対的に悪いことはないのだが、やはり、両者の実現する価値は著しく異なる。このとき、両者のどちらがよいかを判断するために、実践理性の果たしうる役割はもはやないのであろうか。ないと答えるのも一つの考え方である¹¹。その場合には、動機の力の強い方の選択肢が選ばれるほかなく、したがって、なるべくこれまでどおりの生活を続ける第一の選択肢が選ばれるであろう。

・根拠なき価値判断と「動機による乗っ取り」

しかし、ここでもまだ実践理性の果たしうる役割があると考える道筋を、さらに模索してみよう。一つの考え方は、残った二つの選択肢で、どちらが価値が高いかを判断することは可能だが、それはもはや、さらなる合理的な理由を与えることのできない「根拠なき価値判断」だということである。仮にこの人が、田舎に引越すプランの方が高い価値を持つと判断したとしよう。彼に対して、なぜそう考えるのか、それはこれまでどおりの生活とはかなり違う生活で、それぞれが実現する価値も大きく異なるのに、どうしてそう判断できるのかと問うても、彼はそれにまともに答えることはできない。とにかくそう思うのだと主張するのみである。その意味で、この価値判断は根拠なき跳躍である。

そのような根拠なき価値判断がもし可能ならば、それは価値の多元性と両立可能なものでありうる。なぜならばそれは、二つの選択肢が実現する異なる価値を何らかの仕方でも一つの尺度に統合し、その尺度上での大小を比較するというプロセスを経て下されたものではないからである。

だが私の見るかぎり、この道筋には見込みがない。というのもこの人はそもそも、田舎に引越す選択肢の方が価値が高いという判断を下すはずがないのである。なぜならば、根拠なき価値判断には合理的な理由がなく、そうである以上、それは私がここで「動機による乗っ取り」と呼ぶものに曝されるだろうからである。その論点を説明しよう。想定上、彼は残った二つの選択肢のうち、これまでどおりの生活に対してより強い動機を持っているのであった。すると、根拠なき価値判断はその動機を反映し、これまでどおりの生活の方がよいという判断になることを運命づけられるであろう。なぜならば彼には、差支えなければそう判断したい動機

¹¹ Raz (1997) はその考え方をとっているものと見られる。

があるし、しかも、そう判断してはいけない理由が何一つないからである。これが、動機による乗っ取りである。結局ここでは、根拠なき価値判断は動機の言いなりになっており、行為を導くことにおいて何ら独自の役割を演じていない。したがってこの道筋は、議論を前進させるものではないのである。

・総合的価値判断

ここで導入される最後の考え方が、私が「総合的価値判断」と呼ぶものである¹²。以下ではそれを概観したうえで、それがやはり動機による乗っ取りに対して脆弱だという考察を行いたい。テイラーによると、多様な価値の関わる局面での選択において、とりわけ先の例のような人生の重要な岐路においては、それぞれの選択肢を選択した場合に自分の人生が全体としてどのようなものになるかを考慮しなければならない。そしてその考慮に際しては、人生を構成するさまざまな要素が、各々の担う価値の面で調和し、補完し合うかどうかが重要である。彼は次のように言う。

だが、われわれが自分の人生を、自分がどのような歩みを進めたいのかを意識するならば、われわれは自らが追求する異なるいくつかの善を、それらの持つ異なる重要さに即してだけでなく、それらがわれわれの人生の展開の中でどのように互いに調和するか、あるいは調和しないかによっても関連づけることになる。それらの善はわれわれの人生の中で異なる役割を演じ、異なる場所（そしてこれは異なる時という意味でもありうる）を占めるであろう。そしてこのことを把握することは、われわれが何をすべきかを決断するのに有益であろう¹³。

ここで大切なことは、さまざまな善のあいだの一種の補完性である。ただし、それらの善は衝突しうるのである。決断をもたらす決定的な推論は、ここでは重みづけとはあまり関わっておらず、むしろ、補完性を意識すること、そして、一方の側が他方の名のもとに圧倒されると、どのように補完性が脅かされるに至るおそれがあるかを意識することに関わっている¹⁴。

ここで彼が「善」と呼ぶものは、私が価値と呼ぶものに相当すると考えてよい。

テイラーがとりわけ強調するのは、自分の人生が全体としてどのようなものになるかを考慮せず、特定の種類の価値だけをひたすら追い求めることが、いかにその人の人間性を損なうかである。歴史を見れば、たとえば20世紀の革命家たちが最終的にどんな「化け物」になったかがわかるだろうと彼は言う¹⁵。

すると先の例の人は、長年にわたって会社勤めをしてきたのだから、その後の人生は田舎に引っ越して過ごす方が、人生における諸価値の補完性の点で望ましいと判断することができる。会社勤めによって実現された価値と、田舎での晴耕雨読によって実現される価値は大きく異なるため、定年を機会として前者の価値の追求から後者の価値の追求へとシフトすることに

¹² 以下の考察は主に Taylor (1997) による。Stocker (1990), pp. 300-302 にも同様の論点が見られる。

¹³ Taylor (1997), p. 180.

¹⁴ Ibid., pp. 181-182.

¹⁵ Ibid., p. 181.

より、彼の人生は全体として諸価値が相互に補完し合う、より調和のとれたものになると思われるからである。これが総合的価値判断である。

こうした総合的価値判断は、価値の多元性のテーゼと抵触しないばかりか、むしろそれを前提とするものである。価値が一元的な尺度に統合可能であったなら、目指されるべきは調和や補完性ではなく、その尺度のもとでの最大化になるはずである。人生における諸価値が多面的で、人間らしい生き方はそれら多様な諸価値との適切な関わり方に存するからこそ、それらの調和や補完性が目指されるのである。

するとわれわれは、先のトリレンマに対しても、これで一つの解決にたどりついたことになる。すなわちこの人は、残された二つの選択肢で、どちらが価値が高いかの判断を下すことができ、しかもその判断は価値の多元性のテーゼに抵触しない。そして彼がそのような判断を下したならば、意志の弱さが生じないかぎり、価値評価と動機の相即性および動機の一元的比較可能性の両テーゼに即して、価値が高いと判断された行為への十分に強い動機が形成され、その行為が実際に遂行される。

ところで、このような総合的価値判断は、何らかの形式的な手続き、とりわけ意思決定論的な最大化の手続きとして捉えられるものではない。諸価値を一元的な尺度に統合できない以上、これを最大化として捉えることができないのは当然である。だがそれにもまして、テイラーも強調するように、総合的価値判断は、その行為主体が置かれたその状況の具体性や、その行為主体がそれまでにたどってきた人生の歩みとその精神的成熟の度合いなどに著しく影響される。したがってそれは、何らかの手順をあてはめることで一意的に導出しようとする判断ではないのである。

テイラーの指摘によるまでもなく、価値の多元性のもとでの選択が形式化や手順化になじまないことは、これまで十分に指摘されてきた¹⁶。逆に、経済学や意思決定論、功利主義のような一元的体系が、著しく直観に反するにもかかわらず根強い支持を持つ理由の一つは、それが形式化や手順化になじむという魅力を持つからである。そしてテイラーの議論も、それが形式的な手順を提案するものではないために、やはりさまざまな困難に直面するものと思われる。その一つが、先にふれた「動機による乗っ取り」である。

先の例の人は、人生における諸価値の調和や補完性を考慮した総合的価値判断を経て、田舎に引っ越す方がよいという判断に至ったのであった。しかし総合的価値判断は、それとは逆の判断へと導いてもよかったのではないだろうか。諸価値の調和や補完性は、必ずしも、一つの極端から他の極端に飛び移ることを推奨するものではないはずである。会社での仕事に多大な時間とエネルギーを捧げていた人が、とつぜん晴耕雨読の日々にシフトしたら、その人の人生は一つの調和ある統合されたものにならないかもしれない。それは断絶のある不調和な人生となるおそれがあるだろう。するとむしろ、彼は当面なるべくこれまでどおりの生活を続け、心身の衰えに伴って次第にスローダウンしていく方が、諸価値の調和や補完性という点でよりよい人生を送れるのではないだろうか。このように彼は、もう一方の、これまでどおりの生活を続けるという選択肢にも、それを支持する相応の理由を見出しようように思われる。

仮に、総合的価値判断が効用最大化のような形式的な手続きとして捉えられるものであったなら、その手続きを厳密にあてはめることにより、上の二つの選択肢のどちらが本当によいか、

¹⁶ たとえば Nagel (1977) p. 135 は、価値の多元性のもとでの判断の方法を模索することは、「それがアリストテレスによって手がけられて以来、しばしば敗北主義的で空虚なものとなされてきた」と述べている。

現実的にはともかく原理的には決定できるはずである。しかし総合的価値判断は形式的な手続きではないため、二つの選択肢の各々を支持する二つの理由を吟味しても、そのどちらがより強力かを異論のない明確な仕方では決定することはできない。また、そのどちらかに、計算間違いや推論上の誤謬に類する歴然とした瑕疵があることを発見することもできない。

すると総合的価値判断は結局、二つの選択肢のいずれについても、それを支持するもっともらしい理由を見出しうるのだから、根拠なき価値判断と同じく、動機による乗っ取りに対して脆弱なのではないだろうか。想定上、この人は実践理性の行使に先立って、これまでどおりの生活を続ける方の選択肢により強い動機を持っているのだった。総合的価値判断を下す際に、そちらの選択肢を支持する十分にもっともな理由を探せば見出しうるのなら、彼はきっと喜んでそうするだろう。つまり、自分が当初からより強い動機を持っていた方の選択肢が、価値評価の観点からもよい選択肢だという考えに安住するだろう。そして、そうしたからといって彼を合理性に欠けると批判するのは、かなり困難なことである。このように、総合的価値判断はやはり、動機に乗っ取られてその言いなりになるのではないだろうか。換言すると、実践理性は行為を導く独自の役割を演じえないのではないだろうか¹⁷。

なお、すでに論じてきたことからわかるように、この問題は意志の弱さとは異なる別個の問題である。意志の弱さは、どの選択肢がよいかについての判断は理性的に下されたにもかかわらず、その判断に反する行為を行ってしまうことに関わる。他方、動機による乗っ取りは、一見したところ理性的な判断の内実が、実は動機によって決しており、理性は実質的な貢献をしていないのではないかという懸念である。

V. 価値の多元性のもとでの実践理性の素描

本稿の主な目的は、上の問題を提起することであり、それに解答を与えることではない。だが私は以下で、価値の多元性と両立可能な実践理性のあり方とはどのようなものであるか、そしてその実践理性はいかにすれば、動機による乗っ取りに対して多少なりとも強靱でありうるのかを素描したい。

以上で見たとおり、総合的価値判断は、形式的な手続きとして捉えられるものではない。だがそこにはやはり、優れた判断と劣った判断がある。そして優れた判断とは、テイラーが言うように、そのときの状況に関与するさまざまな個別の事情をできるかぎり考慮に入れ、自分にとってどのような生き方が望ましいかを省みた上で下される判断である。総合的価値判断はおそらく、これ以上の理論的、体系的な扱いにはなじまないであろう。それは一種の賢明さ、あ

¹⁷ 上述の論点が抽象的な空論に見える読者には、次の問題を考えていただきたい。裁判官が、困難な事案で判決を下す際、その判決は法律の条文や過去の判例から形式的な手順によって機械的に導出されるわけではない。その事案の個別の事情を考慮に入れ、総合的に判断するのである。すると裁判官は、原告勝訴の判決を下そうと思えばその判決を支持する十分にもっともらしい理由を考えることができるし、被告勝訴の判決を下そうと思えばその判決を支持する十分にもっともらしい理由を考えることができる場合があるかもしれない。ところで、裁判官が考慮に入れるべき事情は、その事案に対する法的な判断に必要な事情に限られ、その裁判官が政治や世論の圧力を受けたとか自分の昇進が気になったとかいうことが仮にあって、それは考慮に入れられるべき事情ではない。しかし実際の裁判官は、本来は考慮に入れられるべきでないそうした事情に動機づけられて、特定の判決を下し、しかもその判決を支持する理由を十分にもっともだとみなす場合があるかもしれない。言うまでもなく、それらの事情が、表向きの判決文中の理由の中で堂々と言及されるわけではない。そうではなく、それらの事情が、裁判官がその判決とその理由とを適切だとみなすに至った、動機としてはたらいだ可能性が残るのである。ところが、もしその判決を法的な観点から批判したければ、批判者はその裁判官の動機ではなく、表向きの理由を批判するほかない。そしてそれは、場合によってはかなり困難なことでありうる。こうした問題は、本稿が論じた動機による乗っ取りの問題と同型である。なお、以上の点を示唆してくださった法学者の高橋和広氏に深く感謝申し上げます。

るいは思慮深さとみなすことができる。そして、実践理性を行使して行為することが人間の本質であるならば、それはこうした賢明さを備えることに帰着する。

われわれが、動機に判断力を乗っ取られてその言いなりになることがないようにするには、つまり、自らが最も強い動機を持つ選択肢が最もよい選択肢だという甘美な考えに安住しないようにするには、結局のところ、賢明さを備え、思慮深く判断をする以外にすべはない。そしてこの賢明さの内実について、われわれは体系的にはなくても、具体的に漸次的な仕方、考察を深めることができる。そして、そのような賢明さを身につけることにより、われわれは優れた価値判断を下し、動機による乗っ取りを完全に免れることはできないにせよ、それに対する相応の強靭さを獲得することができる。

第一に強調すべきは、本稿が見てきたようなさまざまな論点を認識することは、それ自体、人が賢明さを備えるための一歩となりうることである。すなわち、価値には多様なものがあること、それらの諸価値を考慮に入れて判断を行うには総合的価値判断のような考え方があること、そしてそれは動機による乗っ取りに脆弱でありうること、こうした事情を認識することはそれ自体、有意義である。そのような認識を持つ行為主体は、その認識を欠いた行為主体と比較して、優れた価値判断を下し、動機の言いなりにならないように備えることができるだろう。

第二に、本稿では主に総合的価値判断を考察し、それに先立って絶対的価値判断にも若干ふれたが、価値の多元性のもとでの合理的な選択の仕方は、以上に尽きるわけではない。それ以外の方法について個別に検討することも、もちろん有意義である¹⁸。たしかに、それらの方法はいずれも、価値判断を導く形式的手続きを与えてくれるものではなからう。しかし、上の第一の点と同じ理由により、それらの方法を認識することにはやはり、一定の有効性があるはずである。

最後に、本稿は、価値にはさまざまな種類のものがあることを抽象的な仕方、述べたにすぎなかった。だがわれわれは、それら諸価値のそれぞれがどのような価値なのかについて、より具体的に踏み込んで、その本性や源泉を明らかにすべく考察を進めることができる。すなわち、価値には、健康のような生物一般に該当する価値、家族や友人などの親しい人々との関係にまつわる価値、功利主義や義務論の説くような倫理的価値、自分が追求する目標に関わるいわゆる卓越主義的価値などがある。われわれは、これら諸価値の各々について、その具体性に即してさらに理解を深めることができる。そしてその理解は、われわれが直面する個別の現実的状況で、諸価値をどのように考慮に入れて選択をするのが賢明かを見定める際の指針となりうるであろう。

¹⁸ Chang (1997) 所収の諸論文にいくつかの提案が見られる。

参考文献

- Baumann, P. and M. Betzler, eds. (2004), *Practical Conflicts: New Philosophical Essays*. Cambridge: Cambridge University Press.
- Chang, R., ed. (1997), *Incommensurability, Incomparability, and Practical Reason*. Cambridge, Massachusetts: Harvard University Press.
- Davidson, D. (1990), "The Structure and Content of Truth", *The Journal of Philosophy*, Vol. 87, No. 6, pp. 279-328.
- Kahneman, D. (2011), *Thinking, Fast and Slow*. London: Penguin.
- Mele, A. (1987), *Irrationality*. Oxford: Oxford University Press.
- Mele, A. (2004), "Outcomes of Internal Conflicts in the Sphere of *Akrasia* and Self-Control", in P. Baumann and M. Betzler, eds. (2004), pp. 262-278.
- Nagel, T. (1977), "The Fragmentation of Value", in T. Nagel (1979), pp. 128-141.
- Nagel, T. (1979), *Mortal Questions*. Cambridge: Cambridge University Press. (トマス・ネーゲル著, 永井均訳 (1989), 『コウモリであるとはどのようなことか』, 勁草書房.)
- Raz, J. (1986), *The Morality of Freedom*. Oxford: Oxford University Press.
- Raz, J. (1997), "Incommensurability and Agency", in R. Chang, ed. (1997), pp. 110-128.
- Stocker, M. (1990), *Plural and Conflicting Values*. Oxford: Clarendon Press.
- Stocker, M. (1997), "Abstract and Concrete Value: Plurality, Conflict, and Maximization", in R. Chang, ed. (1997), pp. 196-214.
- Taylor, C. (1997), "Leading a Life", in R. Chang, ed. (1997), pp. 170-183.
- Watson, G. (1975), "Free Agency", in G. Watson (2004), 13-32.
- Watson, G. (1977), "Skepticism about Weakness of Will", in G. Watson (2004), pp. 33-58.
- Watson, G. (2004), *Agency and Answerability*. Oxford: Oxford University Press.
- 金杉武司 (2014), 『解釈主義の心の哲学：合理性の観点から』 勁草書房.
- 塩野直之 (2008), 「価値評価と自己コントロール」, 『科学哲学』 第 41-2 号, pp. 1-16.
- 塩野直之 (2019), 「価値の多元性と意思決定論的合理性」, 『科学基礎論研究』 第 46-2 号, pp. 1-13.